

平成18年度企画展

重要文化財公開

# 首里城京の内跡出土品展

～冊封がもたらした陶磁器～



開催期間：平成 19 年 1 月 16 日（火）～1 月 21 日（日）

沖縄県立埋蔵文化財センター



# 目 次

ごあいさつ	1
◎ 展示のあらまし	2
◎ 首里城「京の内」跡とは	3
◎ 重要文化財指定基準	4
◎ 重要文化財指定の名称と指定理由	5
◎ 重要文化財 首里城京の内跡出土陶磁器指定一覧	6
◎ 冊封がもたらした陶磁器	7
◎ 冊封と冊封使の要請	8
◎ 宴用の器としてみた京の内の陶磁器	9
◎ 冊封関係の予備知識	10
◎ 展示品紹介	13
◎ 首里城京の内関連年表	26
◎ 用語解説	28

---

## 凡 例

---

1. 本書は、2007（平成 19）年 1月 16 日から 1月 21 日まで開催する「重要文化財『首里城京の内跡出土品展』」の展示を補完するものとして編集・作成したものである。
2. 本企画展は、沖縄県立埋蔵文化財センターが主催している。
3. 企画および原稿執筆は、金城亀信が担当した。
4. 富島壮英著『冊封使 - 中国皇帝の使者 -』（1989 年）・「冊封使 - 中国皇帝の使者 -」（2005 年）の一部を許可を得て使用した。記して感謝の意を表します。
5. 本書に掲載されている写真・図面等の無断使用は固く禁ずる。

# ごあいさつ

国の重要文化財（考古資料）として指定された首里城京の内跡出土の陶磁器は518点です。これらの陶磁器は、1459年の火災で消失した倉庫跡からまとめて出土したもので、これらの出土品は、中国との進貢貿易、更に、中国と冊封を結んだ周辺諸国（タイ・ベトナム・朝鮮・日本など）との交易によって持ち込まれた陶磁器であると考えられます。

倉庫跡が火災に見舞われた1459年当時の琉球国王は尚泰久です。尚泰久は1454年に即位しますが、中国皇帝が琉球王国の王位継承者として正式に承認する冊封の儀式は、1456年に来琉した冊封使によって行われ、その時はじめて琉球国王として承認されました。

中国と琉球の進貢・冊封関係によって中国の優れた文物が流入し、沖縄独自の歴史と文化が形成されました。

今回の展示は、中国や中国と冊封関係にある周辺諸国との進貢貿易によって持ち込まれた陶磁器を基に、冊封使一行の歓待の宴を首里城内でどのような形で執り行われたかをイメージしてみました。

このような視点から冊封使の宴を陶磁器から考えてみると、国王を中心とした国家を挙げての歓待がイメージできるかも知れません。

今回の企画展を通して、新たな視点で沖縄の歴史や文化に理解を深め、考古学に対する関心を高めていただきたいと思います。

平成19年1月16日

沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 田場清志

## 展示のあらまし

平成 12 年 6 月 27 日付けで国の重要文化財として「沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器 518 点」が指定されました。指定された陶磁器は平成 6 年度に首里城公園内の「京の内」跡の発掘調査で、1459 年の失火により消失した倉庫跡から発見されました。

倉庫跡からは、中国陶磁を主体にタイ、ベトナム、日本の各國との交易によりもたらされた陶磁器が、1,162 個体出土しました。これらの陶磁器については、発見された直後からその使用の在り方についての、二つの意見が考古学研究者からありました。一つが平成 17 年度の企画展で紹介した、聖域である「京の内」由来ということから、琉球王国の重要な祭祀や儀式に使用された陶磁器とする考え方です。もう一つが中国皇帝の使者である冊封使の接待に使用した陶磁器とする考え方であり、今回はその視点から陶磁器使用の在り方について考えてみました。

# 首里城「京の内」跡とは

首里城京の内跡は、正殿、南殿、北殿、奉神門などの政事（政治）を行う建物が集中する区画の南西地区に位置し、面積は約 5,000 m<sup>2</sup>と考えられています。

「京の内」の「京」は、“靈力（セジ、シジ）”と同義語であり、その他にも神が降臨もしくは来訪する岩山や小島（南城市斎場御嶽の大岩を“キヨウノハナ”、また、名護市嘉陽集落の東海上にある小島を“きょう”とも称す）等の名称から、首里城「京の内」は、「神が降臨する聖域」と理解されると共に「靈力のある聖域」と解されます。

さらに「京の内」には、絵図や文献などから沖縄の開闢二神降臨の御嶽（拝所）とされる、“首里森御嶽”・“真玉森御嶽”の二つの御嶽以外に、「京の内之三御嶽」と称された三つの御嶽が存在したようです。

重要文化財指定を受けた資料は、沖縄県教育委員会が実施した 1994 年から 1997 年にかけての復元整備事業に伴う発掘調査で、京の内北西地点から発見されたものです。火熱を受けた状態で中国陶磁器をはじめとする多くの陶磁器類が一括して発見されたもので、文献などから、倉庫跡（3m × 4m）と考えられています。

出土した陶磁器の年代からみて、倉庫が焼け落ちたのは 15 世紀の中頃と考えられています。



# 重要文化財指定基準

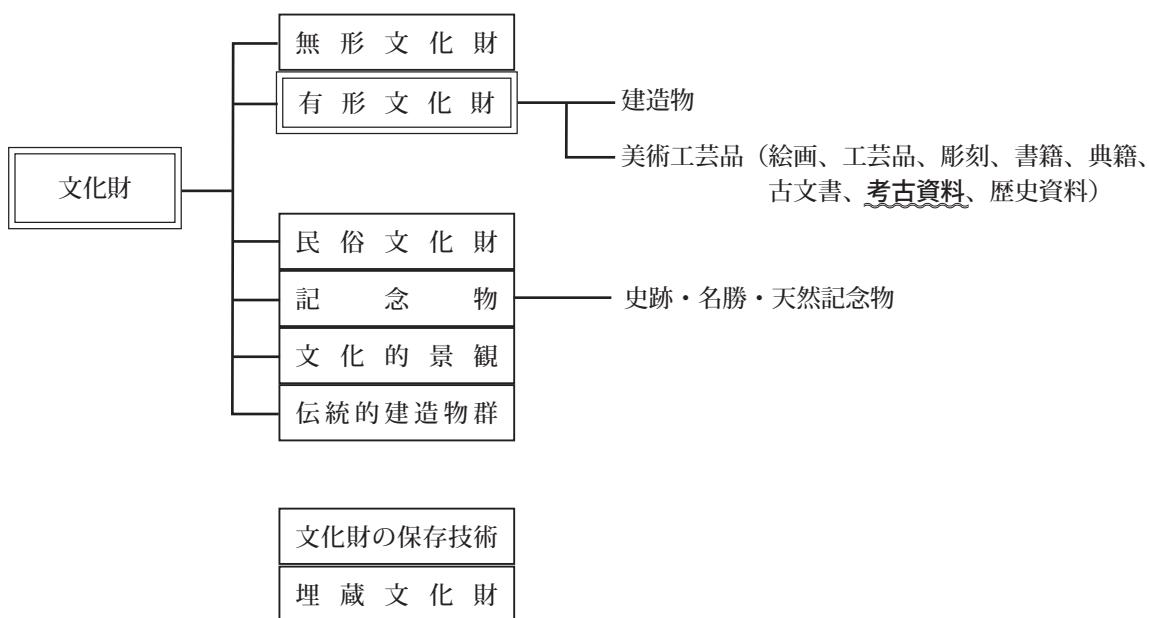
## ◎ 考古資料の部

### 重要文化財

- 一 土器、石器、木器、骨角牙器、玉その他縄文時代及びそれ以前の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 二 銅鐸、銅剣、銅鉾その他弥生時代の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 三 古墳の出土品その他古墳時代の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 四 宮殿、官衙・寺院跡、墓、経塚等の出土品その他飛鳥・奈良時代以後の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 五 渡来品で我が国の歴史上意義が深く、かつ、学術的価値の特に高いもの

※○ 国宝及び重要文化財指定基準・(中略)・基準(抄)(昭和26年5月10日文化財保護委員会 告示第2号)  
〔最終改正〕平成8年10月26日文部省告示第185号より一部抜粋。

## ◎ 文化財の種類 (平成17年4月1日施行の文化財保護法の一部改正により、「文化的景観」が新たな文化財として位置付けられた)



・建造物、絵画、工芸品、彫刻、書籍、典籍、古文書、考古資料、歴史資料などの有形の文化的所産で、我が国にとって歴史上、芸術上、学術上価値の高いものを総称して有形文化財と呼んでいます。このうち、建造物以外のものを総称して「美術工芸品」と呼んでいます。

国は有形文化財のうち重要なものを重要文化財に指定し、さらに世界文化の見地から特に価値の高いものを国宝に指定して保護しています。

※ 首里城「京の内跡」出土の陶磁器等は、「国宝及び重要文化財指定基準」の「考古資料の部」で、国の「重要文化財」として指定答申を受けたことになります。

# 重要文化財指定の名称と指定理由

(考古資料の部)

名称及び員数：沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器 518 点

附 一、金属製品 一括

附 一、ガラス玉 一括

所 有 者：沖縄県（沖縄県立埋蔵文化財センター保管）

(府保美第3の3号平成12年6月27日付け「重要文化財の指定について」  
文化庁次長より沖縄県教育委員会教育長あて通知より作成)

説明文： 尚氏第一王統時代

本件は、沖縄県那覇市首里当蔵に所在する首里城内郭の南西部にあたる、京の内跡の建物跡から出土した陶磁器の一括である。

「京の内」は靈力のある聖域という意味があり、なかに存在した首里森御嶽しゆりむいとうたきは琉球王国の最高神女である聞得大君が神を迎えて、歴代の琉球国王に託宣を下した拝所である。

この京の内跡の発掘調査は国営沖縄記念公園首里城地区整備事業の一環として、平成6～7年度に実施され、約2000平方メートルが調査された。その結果、この建物は天順3年(1459)に焼失したことが判明した。

出土した陶磁器は、中国産の青磁、白磁、明代の染付を中心に、元代の染付、色絵、褐釉陶・磁器、瑠璃釉、紅釉など、タイ産の褐釉陶器、ベトナム陶器、日本の備前陶器等で構成されている。これらは概ね14世紀中頃から15世紀中葉のものである。なかでも紅釉水注は、北京の故宮博物院に2点と景德鎮窯跡出土の破片1点が確認されているのみである。また、元染付の合子は遺存する部分は少ないが、きわめて貴重な出土例である。

また、中国産の陶磁器を中心に、タイ、ベトナム、日本などアジアの主要な陶磁器の生産地から交易によって集められたものが出土している。

琉球王国は首里城正殿前につられていた「万国津梁鐘」の銘文に「船舶を諸国と結ぶ小橋とすることによって異国の宝物類が國中に充満する」(訳文の趣旨)とあるように、中継貿易で栄えた琉球王国の繁栄ぶりを如実に示す貴重な一括資料である。

なおこの建物跡からは、兜鉢、小札、鎖帷子、釘、鍔等の金属製品、火災の際に溶着したガラス小玉塊が出土しており、あわせて保存を図りたい。

(文化庁文化財保護部監修『月刊文化財』平成12年6月号より抜粋)

※官報告示：平成12年6月27日付け文部省告示第120号

※文化財保護法(昭和25年法律第214号)第27条第1項の規定により、平成12年6月27日付けで重要文化財に指定。

# 重要文化財 首里城京の内跡出土陶磁器指定一覧

## 重要文化財 考古資料の部

指定名称及び員数：沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器 518 点

附	一、金属製品	一括
附	一、ガラス玉	一括

## 重要文化財 陶磁器内訳

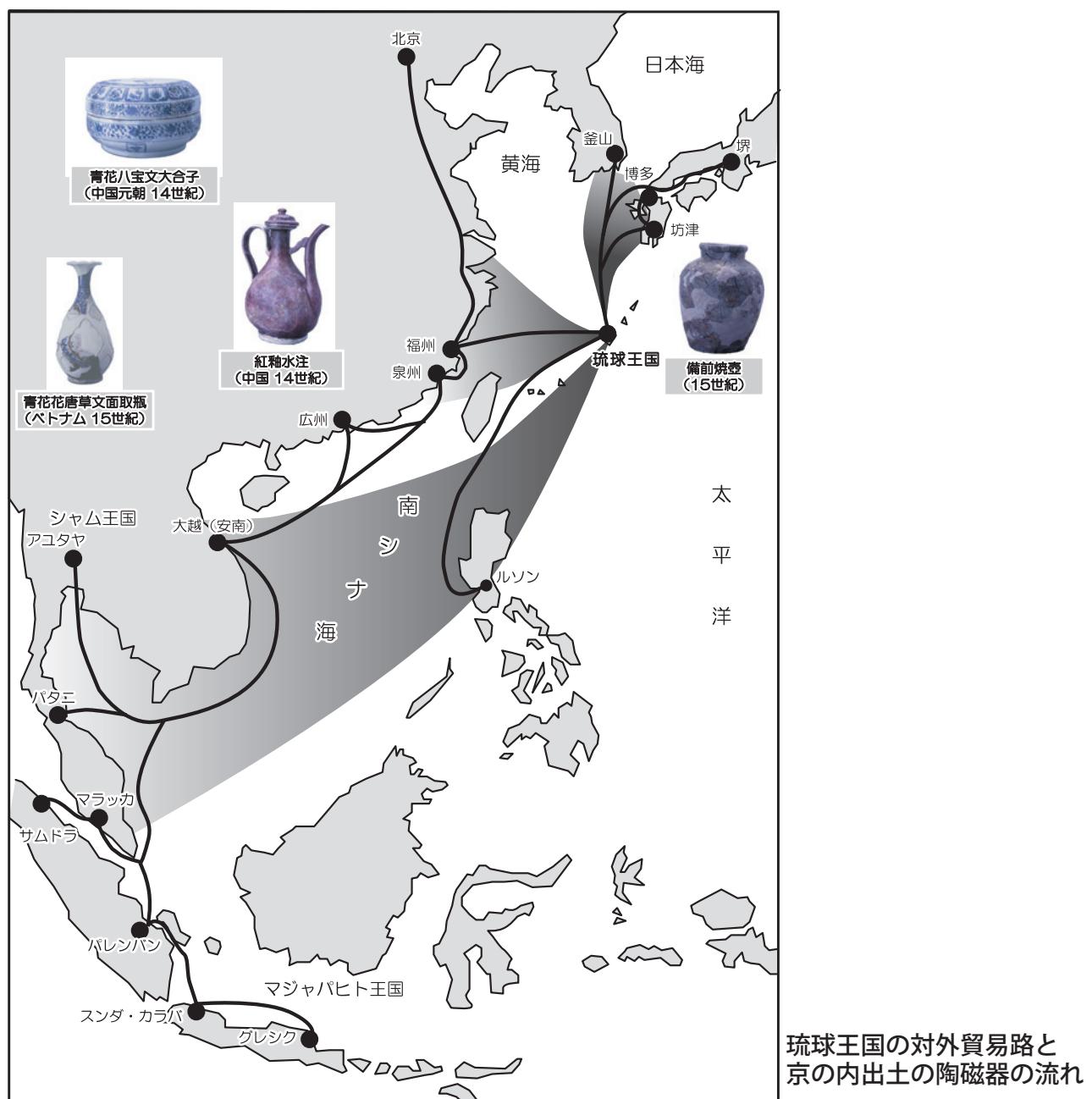
種類	器種：点数	器種：点数	器種：点数
青磁 (289 点)	碗 103	皿 117	盤 32
	壺 20	大花瓶 2	馬上杯 1
	水注 3	瓶 5	香炉 3
	水滴 1	花盆台 1	大鉢 1
白磁 (33 点)	碗 14	皿 11	杯 2
	水注 1	壺 1	瓶 4
元染付 (2 点)	馬上杯 1	大合子 1	
明染付 (58 点)	碗 32	皿 4	杯 3
	鉢 1	瓶 14	壺 4
色絵 (3 点)	碗 2	皿 1	
紅釉 (1 点)	水注 1		
瑠璃釉 (2 点)	碗 1	瓶 1	
褐釉磁器 (1 点)	碗 1		
褐釉陶器 (35 点)	壺 30	水注 1	鉢 1
	壺蓋 1	特殊壺 1	
	蓋 1		
白釉陶器 (3 点)	壺 2	水注 1	
タイ産褐釉陶器 (55 点)	壺 55		
タイ産半練土器 (22 点)	蓋 18	壺 4	
ベトナム陶器 (3 点)	瓶 1	水注 2	
備前ほか (本土産) (6 点)	擂鉢 1	甕 3	壺 2
瓦質土器 (沖縄産) (5 点)	蓋 5		
合計		518 点	

# 冊封がもたらした陶磁器

冊封とは、中国皇帝が使者を派遣して琉球国王を任命することを言います。本来は皇后、親王世子、諸侯（郡王、郡主、県主）との君臣関係の秩序をさしましたが、周辺諸国の王を任命することも含めていたようです。

冊封体制は、明代以降に著しくなり、朝鮮・日本・琉球・ベトナム（安南）・タイ（暹羅）・マレーシア（満刺加）・インドネシア（爪哇・三仏齊・蘇門答剌）などの10カ国余りが入貢し、進貢国（朝貢国）となりました。

冊封体制の下で歴代の琉球国王が、中国をはじめ、中国と冊封関係にある周辺諸国との進貢貿易によってもたらされた多種多様な品々の中で、中国陶磁を中心にタイ・ベトナムなどの諸国からもたらされた陶磁器が首里城京の内跡の倉庫から出土しています。



## 冊封と冊封使の要請

最初に、首里城京の内跡倉庫跡出土の陶磁器と今回のテーマである冊封使の招宴を考える上で、歴史的な事実関係を整理する必要があります。時系列的な整理を進めると次のようなことが確認できます。

- ① 1454 年：尚泰久の即位。
- ② 1456 年：冊封使の李秉彝ら来琉。
- ③ 1459 年：火災により京の内の倉庫が消失。

の三件です。

第一尚氏王統（1406～1470年）の政治形態は、祭政一致（神への祭祀と国家の政治とが一致する）で行われています。そのため、琉球王国の国王となるには、次の二つの儀式を終えてはじめて王位に就くことができるのです。

第一段階が、国王即位の可否決定ができる降臨神キミテズリの出現を請うことでの靈力を持った最高神女の佐司笠が中心となって高級神女達を交え国王即位の可否の判断を請うものです。この儀式は京の内で行われ、国王として承認された場合（この儀式で第二尚氏王統の尚宣威が1477年に王位に就くことができず王位を尚真に譲った）は、次の第二段階へ進みます。

第二段階が冊封（中国皇帝の使者を派遣し琉球国王としての位を授け任命）と称された重要な儀式です。なお、第二尚氏王統（1470～1879年）では尚賢（即位期間1641～47年）が明清の興亡（1644～1662年）により、また尚益（即位期間1710～12年）・尚成（即位期間1803年）は、本人の死去により冊封を受けることができなかつたようです。

# 宴用の器としてみた京の内の陶磁器

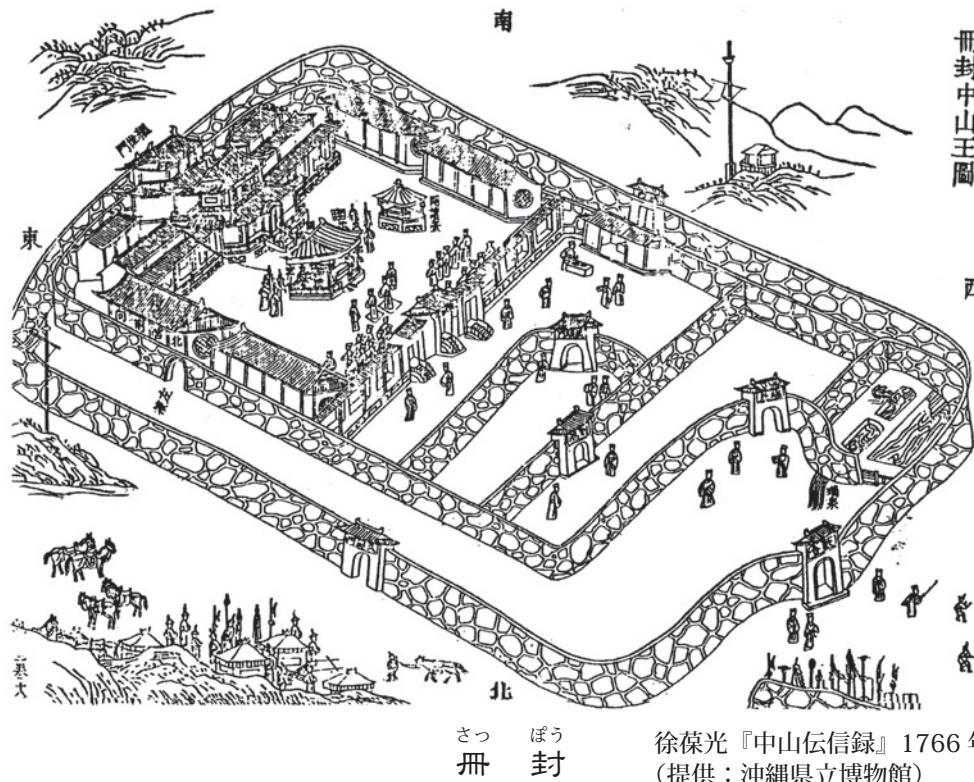
さて、1456年に尚泰久の冊封のために来琉した冊封正使李秉彝、副使劉僕ら一行が大きな任務である諭祭（死没した先王の祭り）と新王の冊封を終えると、国王招待の宴が行われました。（1719年に来琉した冊封副使の徐葆光が報告した『中山伝信録（1766年）』によると、冊封使の来琉から帰国するまでの間に国王が招待する「七宴」と称される大宴が文字通り七回開催された）国王の招宴に使用された陶磁器は、中国をはじめ、中国と冊封関係にある周辺諸国との進貢貿易によってもたらされた、多種多様の品々を納めた倉庫の中から、特に中国陶磁を中心にタイ・ベトナムなどの諸国の陶磁器から冊封使の宴用に優品を中心に選択し、使用しました。

現時点での研究成果を基に京の内出土の陶磁器を、宴用の器として想像し展示してみました。

国王使用の主な陶磁器で注目されるのは、世界的にも中国故宮博物院所有の二例しか確認されていなかった元末期の紅釉水注、明初期の青花龍文高足杯（世界に20点程度が存在）、明初期の五彩菊花文碗（世界に4点が存在）などでありこれらを配置しました。

中央には元末期の青花八宝文大合子（世界にも例のない一品）を配置し、大合子の周辺には一輪挿しとしてベトナム青花花唐草文面取瓶（類例資料がベトナム・ホイアン沖海底の引き上げ品に数個体ある）を配置しました。

冊封使正使・副使が使用したと推定されたるは、明初期の白磁碗と白磁小皿（国内の遺跡からはセット関係で出土）、青磁高足杯及び青花小杯（京の内から出土した個体数が各2点ずつ出土）などを配置しました。



# 冊封関係の予備知識

## 1) 冊封使の来琉

1368年に明王朝が建国された直後の1372年1月には、琉球国中山王察度が中国皇帝の招諭（皇帝からの招待）を受け、同年12月に使者として泰期（察度の弟？）を遣わし、はじめて中国へ進貢します。これに対して、中国皇帝は永樂2（1404）年にはじめて時中を冊封使正使として派遣し、中山王の武寧および南山王の汪応祖を冊封しました。

この時から1868年の最後の琉球国王尚泰までに24回（1407年の中山王思紹、1415年の南山王他魯毎の冊封を含む）冊封使を派遣しています。原則的に、国王が代わるごとに冊封使を派遣しますが、在位期間の短い尚宣威（政略による王位譲渡）、尚益・尚成（死去）と明清交代の動乱期の尚賢の各王は冊封を受けることができませんでした。

## 2) 冊封使の身分と構成

中国から派遣される冊封使の身分は基本的に次のとあります。正使と副使は以下の行人が充てられています。

①行人（賓客、外国への使者を掌る）、②内官（宮中に奉仕する宦官）、③都察院（各行政機関の監察を掌る役所）の吏科（文官の監察、吏部および順天府の文書の検閲を掌る）、④兵科（軍政事務の監察・同文書の検閲を掌る）、⑤刑科（裁判事務の監察・同文書の検閲を掌る）、⑥戸科（財政事務の監察・同文書の検閲を掌る）、などの給事中（明代の六科の事務を監察）など役職者です。

次に冊封使一行の主な構成は、正使・副使、正使の家人（従者・召使）20名、副使の家人15名、書弁（書記）、通事（通訳）、医者、道士（道教の僧）、芸人、しもべ（召使）、門番、轎傘夫（かごかき、傘持）、吹鼓手（路地楽隊員）、千総（軍隊の尉官）、官兵（兵隊）200名などの他に船戸（船長）、夥長（航海長）などの船舶乗組員です。一行の人員は、400～500名が一般的な数であったと言われています。

## 3) 冊封使の渡航船と航路

冊封使一行の渡航船は、御冠船（冠船）或いは封舟と言います。1534年に来琉した冊封使正使陳侃が乗船した冠船（封舟）の規模（明代の1尺=31.1cmで計算）は、長さ15丈（46m65cm）、幅2丈6尺（8m08cm）、深さ1丈3尺（4m04cm）の新造船であったようです。

冊封使は、二隻の冠船に500名前後が分乗します。琉球への渡航は、旧暦5～6月の間に福州で乗船し、閩江にて飲料用水を確保して五虎門や梅花港から南西の季節風を利用して外洋に出帆します。進路は台湾よりに向けて北上し、尖閣諸島を通過して久場島、大正島、久米島、渡名喜島、慶良間諸島、那霸港に至る経路です。航海日数は、短い例で4日、長い例では23日で、平均11日程度で中国から渡航します。帰路は旧暦9～11月の間に北東の季節風を利用して那霸港、慶良間諸島、久米島まで行き、久米島から一挙に浙江省温州沖合の南紀山、里麻山に進路を取って、そこから南下して閩江河口の五虎門に至る経路です。帰路の渡航日数は、短い例で6日、長い例で16日、平均10日程度でした。冊封使の滞在期間は4ヶ月から8ヶ月に及びます。

## 4) 冊封使の宿舎と接待

16世紀に来琉した冊封使一行の宿舎は、天使館（現在の那覇市東26番地の那覇市医師会付近）が滞在中の宿舎となったようです。接待には、琉球王府が天使館および近くに支応七司を臨時に設置しました。七司の名称と部署の業務内容は以下のようです。

①館務司：天使館の庶務的な業務、②承応所：營繕・用度、③掌牲所：羊、豕、鶴鳩の支給。④供応所：酒、米、副食品の支給、⑤理宴司：王府接待の七宴の開催、⑥：書簡司：文書事務、⑦評価司：冊封使一行の持渡品の評価と買取り。以上の七つの役所で、大夫、里之子、筑登之、雑役などを含めた20名が配置されました。

## 5) 冊封使の任務

冊封使の大きな仕事は、死去した先王の諭祭（死没した国王を祭る）と新王の冊封です。

### (1) 諭祭

諭祭の行われる日は、三司官（3人の大臣）以下の役人が金鼓隊、儀仗隊（儀式および国賓の警護）を率いて冊封使を先導して崇元寺に案内します。新王は崇元寺橋前で出迎えて崇元寺の安置された先王の神位（祭儀に神靈をすえる所）の前に案内をして、冊封使が先王の神位に香を上げ、杯（爵）を献上し、宣読官が諭祭文を読み上げます。

次に、国王が帛（絹布）を焚き、諭祭文を火にくべて燃やします。これで諭祭が終了します。

### (2) 冊封

冊封使の最大の任務であった冊封の式典は、首里城正殿前の庭（御庭）で行われました。

式典前日に闕庭（宮殿の庭・御所。ここでは冊封礼用の特別な構築物）、宣読台（開読台）、露台（屋根のない舞台）などが準備されます。冊封の行われる日は、諭祭の日と同様に天使館に夜明け前に三司官以下の役人が金鼓隊、儀仗隊を率いて冊封使を首里まで案内します。新王は守礼門の前で出迎えて首里城正殿前まで案内します。

冊封の式典は、①新王が闕庭に備え付けられた香机にある香炉に香をあげます。②宣読台で冊封の詔書（皇帝が意思を明示した公文書。詔勅、勅諭）を冊封正使が読み上げます。③次に冊封正使によって詔勅が読み上げられ、王位継承者を琉球國中山王として封（琉球国王の領土として認める）じ、新国王と王妃に緞疋（絹織物の反物）・彩帛（文様のある絹布。綵帛と同じ）の授与が厳粛に行われました。

## 6) 国王招待の七宴

国王は、冊封使の滞在中に七回のもてなし行事を催しました。この招待行事を「七宴」と言います。七宴の主な内容は以下のとあります。

一、諭祭の宴（崇元寺での先王への諭祭の式典）。二、冊封の宴（首里城正殿前の庭での冊封の式典）。三、中秋の宴（旧暦八月に首里城正殿前の庭に設置された舞台での琉球舞踊を北殿から冊封使と国王が鑑賞）。四、重陽の宴（旧暦九月九日に龍潭・首里城内で行われた宴。龍潭で爬龍船の戯（競争）を鑑賞後に首里城北殿の席から正殿前の庭の仮設舞台で舞踊と組踊を鑑賞）。五、餞別の宴（首里城北殿で行われ、重陽の宴と同じように組踊などを鑑賞）。六、拝辞の宴（首里城北殿で行われ、組踊・戯樂を鑑賞した後、世子（国王の後継ぎ）の住居であった中城御殿で小宴）。七、望舟の宴（国王が冊封使一行の宿舎である天使館に赴き宴を開く）。

## 7) 進貢使

明・清皇帝への進貢（服属国（琉球王国）が宗主国（中国）へ貢ぎ物を献上することを言います）のため琉球から中国に派遣された使者を進貢使と言います。琉球の使節であった進貢使の数は明代は約300人、清代が約150人であったようです。明代初期の進貢使は王弟や寨官（按司と同じ）が、第二尚氏王統（1470～1879年）に官職名が整備され、進貢正使には耳目官（監察官）または正議大夫、副使には長史（久米村の役職名、中国往来の文書を管理。久米村は1392年に成立した中国系住人の集落）または正議大夫が任命されました。琉球王国の最後の進貢船は1874（明治6）年でした。

## 8) 尚泰久（1415～1460年）

第一尚氏王統（1406～1470年）6代目の国王。国王としての在位期間は7年間（1454～1460年）です。はじめは越来（越来間切：王府時代の行政区で現在の沖縄市から石川市一帯）の領主として越来王子と称していましたが、5代国王尚金福（1398～1453年）の死去により世子志魯と王弟の布里が王位継承を争って首里城正殿・王庫や中国皇帝から下賜された鍍金銀印などを焼失させ、両者の死亡で幕切れとなつた。いわゆる志魯・布里の乱（1453年）と呼ばれた争乱です。1454年に王弟として王位を継いだ尚泰久は、争乱により鍍金銀印が消失したことを中国皇帝へ報告し、再交付を請い支給されています。1456年には冊封正使の李秉彝ら一行が来島し、故王の尚金福の諭祭を行い、尚泰久を中山王として封じました。

尚泰久の在位期間中に起きた主な事項は、即位の年にあたる1454年に「大世通寶」を鋳造、1458年の「護佐丸・阿麻和利の乱」・「万国津梁の鐘」の鋳造、1459年の王府倉庫焼失（京の内の倉庫消失）・第二尚氏王統（1470～1879年）の始祖となった金丸（1415～1476年）、後の尚円（在位期間1470～1476年）を御物城御鎖之側に登用などがあります。

### 引用文献・参考文献

- ・徐 葆光 著・原田禹雄 訳注『中山伝信録』言叢社 1982年
- ・沖縄大百科事典刊行事務局『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社 1983年
- ・富島壯英『冊封使 - 中国皇帝の使者 - 』沖縄県立博物館 1989年3月
- ・富島壯英「冊封使 - 中国皇帝の使者 - 」『首里城復元期成会会報』第23号 2005年7月
- ・首里城公園管理センター「冊封 - 中国皇帝の名でおこなわれた琉球国王の即位式 - 」『首里 城北殿パネルの解説』（リーフレット）財団法人海洋博覧会記念公園管理財団発行

展示品紹介



1. 青花牡丹唐草文梅瓶 (蓋)  
15世紀：明初期  
口径 9.0cm 器高 8.4cm 底径  
7.2cm



2. 青花牡丹唐草文梅瓶 (身)  
15世紀：明初期  
口径 5.5cm 器高 35.2cm 底径 12.3cm



3. 青磁吉祥字文壺（蓋）

15世紀前期：明初期

口径 30.2cm

器高 8.3cm

底径 20.2cm

4. 青磁吉祥字文壺（身）

15世紀前期：明初期

口径 25.5cm

器高 26.3cm

底径 19.0cm



てつゆししがたぼたん  
鉄釉獅子型釦



5. 白磁玉壺春瓶

15世紀：明初期

口径 6.7cm 器高 24.3cm 底径 9.1cm



6. こう ゆ すいちゅう  
**紅釉水注**  
14世紀：元末期  
口径 6.7cm 器高 25.7cm 底径 9.6cm



7. はくじがいはんこうえんはい  
**白磁外反口縁杯**

15世紀：明初期  
口径 8.0cm 器高 3.6cm 底径 2.8cm



8. せいかりゆうもんこうそくはい  
**青花龍文高足杯**

14世紀後期：明初期  
口径 14.2cm  
器高 11.8cm  
底径 4.7cm



9. はくじこざら  
**白磁小皿**

15世紀：明初期  
口径 9.3cm 器高 2.4cm 底径 4.6cm



11. はくじがいはんこうえんさら  
**白磁外反口縁皿**

15世紀：明初期  
口径 12.2cm 器高 2.9cm 底径 5.9cm



10. ごさいきくはなもんわん  
**五彩菊花文碗**

15世紀前期：明初期  
口径 11.0cm 器高 5.9cm 底径 4.4cm



12. はくじわん  
**白磁碗**

15世紀：明初期  
口径 12.0cm 器高 4.2cm 底径 4.1cm



せい か ば たんからくさもんつば  
13. 青花牡丹唐草文壺

15世紀：明代

口径 6.2cm

器高 (10.2)cm

底径 6.4cm



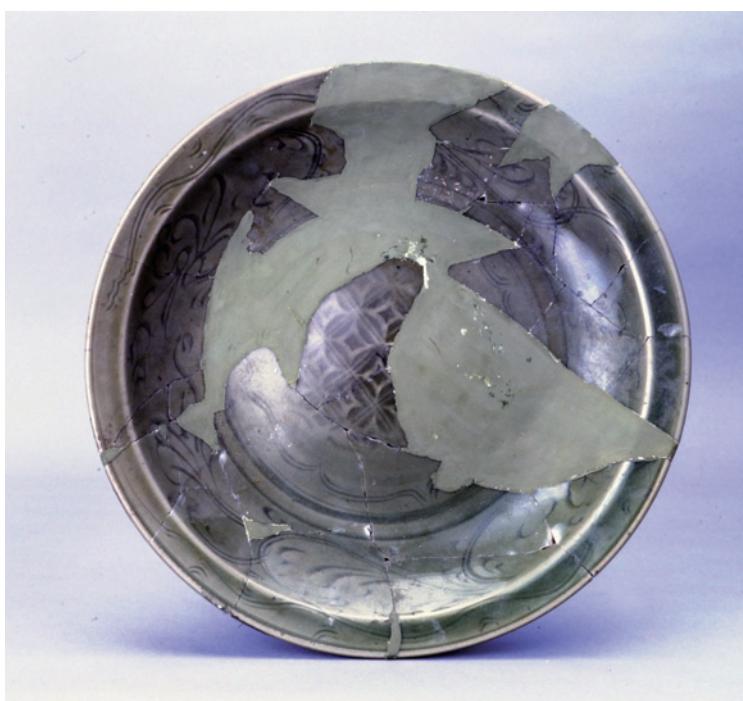
せい か うんどう で もん おおはち  
14. 青花 (雲堂手文) 大鉢

15世紀：明初期

口径 25.3cm

器高 (11.1)cm

底径 (10.7)cm



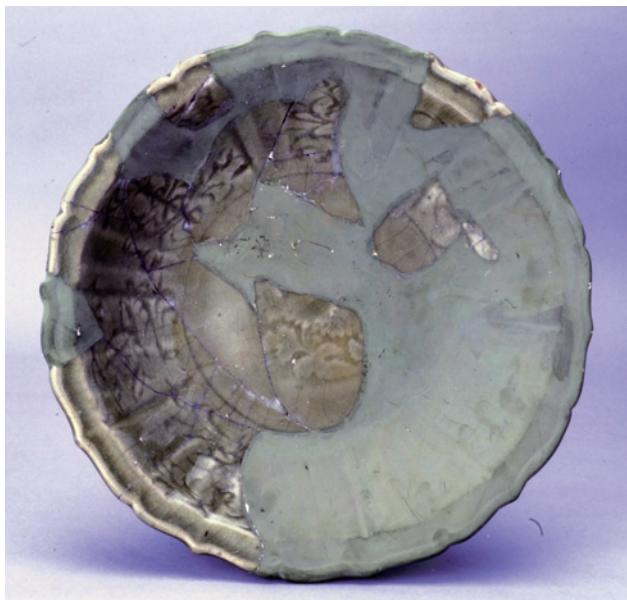
せい じ つばぶちばん  
15. 青磁鷄縁盤

15世紀前期：明初期

口径 33.8cm

器高 4.9 ~ 5.3cm

底径 16.2cm



せい じ りょう か ばん  
16. 青磁 稜花盤

15世紀前期：明初期  
口径 33.2cm 器高 6.6cm 底径 15.4cm



せい か はっぽうもんおおごう す  
17. 青花八宝文大合子（身・蓋）

14世紀：元末期

口径 30.4cm

器高 18.3cm

底径 22.2cm



18. 青花八宝文大合子（内蓋）

14世紀：元末期

口径 29.0cm

器高 2.9cm

底径 28.2cm



せい か はなからくさもんめんとりびん  
19. ベトナム青花花唐草文面取瓶

15世紀

口径 9.2cm 器高 29.8cm 底径 9.0cm



せいじ ちょつこうこうえんばん  
20. 青磁 直口口縁盤

15世紀前期：明初期

口径 28.1cm

器高 4.0cm

底径 15.0cm



せいじ つばぶちばん  
21. 青磁鈔縁盤

15世紀前期：明初期

口径 31.6cm

器高 5.5cm

底径 14.7cm



22. 青磁鈔縁盤

15世紀前期：明初期

口径 31.0cm

器高 5.7cm

底径 13.4cm



せいじからくさもんおおはち  
23. 青磁唐草文大鉢

15世紀：明初期

口径 26.8～30.6cm 器高 12.3～13.9cm 底径 10.2cm



せいかこつぼ  
24. 青花小壺

15世紀：明代

口径 6.8cm 器高 (10.8)cm 底径 6.2cm



はくじわん  
25. 白磁碗

15世紀：明初期

口径 12.0cm 器高 5.4cm 底径 4.5cm



26. 白磁碗

15世紀：明初期

口径 11.0cm 器高 4.6cm 底径 3.4cm



せいかきりんもんざら  
27. 青花麒麟文皿

15世紀：明代

口径 20.8cm 器高 4.8cm 底径 12.2cm



28. 青花麒麟文皿

15世紀：明代

口径 20.0cm 器高 4.4cm 底径 12.1cm



はくじこざら  
29. 白磁小皿

15世紀：明代

口径 9.8cm 器高 2.5cm 底径 4.6cm



30. 白磁小皿

15世紀：明代

口径 9.5cm 器高 2.5cm 底径 2.5cm



31. 青磁高足杯

15世紀：明代

口径 (8.3)cm

器高 9.4cm

底径 3.6cm



32. 青花小杯

15世紀：明初期

口径 9.0cm 器高 (4.8)cm 底径 (3.1)cm



33. 青花小杯

15世紀：明初期

口径 (6.5)cm 器高 (4.4)cm 底径 3.5cm



34. 青磁牡丹唐草文水注

15世紀前期：明初期

口径 6.4cm 器高 23.6cm 底径 6.8cm



35. 青磁玉壺春瓶

15世紀前期：明初期

口径 7.8cm 器高 23.2cm 底径 7.1～7.3cm



37. 青磁蓮弁文壺（身）  
はくじれんべんもんつぼ

15世紀前期：明初期

口径 21.5cm

器高 21.2cm

底径 17.6cm

36. 青磁蓮弁文壺（蓋）  
はくじれんべんもんつぼ

15世紀前期：明初期

口径 26.0cm

器高 8.2cm

底径 15.7cm



38. 青花牡丹唐草文梅瓶（蓋）  
せいかぼたんからくさもんめいびん

15世紀：明初期

口径 9.1cm 器高 (8.4)cm 底径 (6.8)cm

39. 青花牡丹唐草文梅瓶（身）  
せいかぼたんからくさもんめいびん

15世紀：明初期

口径 5.5cm 器高 35.9cm 底径 11.8cm





## 首里城（しゅりじょう）

県内最大のグスクで、伝承によると14世紀頃に察度が築城し、琉球処分（1879年）までの約500年間  
琉球王国の王宮として機能した。標高100～135mの琉球石灰岩の丘陵上に位置し、グスクの規模は、東西  
370m、南北213m、面積46.167m<sup>2</sup>。首里城は、大きく外郭と内郭で構成され、外郭には歓会門、久慶門、木曳  
門、継世門を開く、内郭には瑞泉門、漏刻門、右掖門、淑順門、白銀門、美福門などを設け、正殿、南殿、  
北殿などの木造瓦葺きの諸宮殿など政治の中核的な施設を建立した。正殿跡の遺構確認調査（基壇は、第Ⅰ  
期から第Ⅴ期までが重複）で第Ⅰ期基壇は、14世紀代に位置づけられている。

京の内（きょうのうち）

「京の内」は、首里城内郭の南西側に位置し、城内で最も神聖な空間。「京の内」は『あもろさうし』に「きやのうち」「けあのうち」「けよのうち」と表記されている。語義として、「けあ」は「セジ」(靈力)の同義語として考えられ、“神”または“神の靈力”の意味を持つ。また、民俗学では、神が降臨する大岩の頂上や岩島・小島を「京(きょう)」と称している事例などから、京の内は、神が降臨する“聖なる場所(聖域)”と考えられる。京の内一帯が首里城発祥の地とも言われ、京の内には“首里森御嶽”、“真珠森御嶽”的に“京の内之三御嶽”と称された三つの御嶽があった。首里森御嶽は、開闢神阿摩美久(アマミキヨ)が造った御嶽とされ、降臨神である天神または陽神“キミテヅリ(君手摩)”の神を迎えて琉球王国の即位決定をはじめ国王への託宣を下すなど、琉球王国の重要な祭祀が執りあこなわれた。さらに『あもろさうし』(1531年～1623年編纂、1710年再編纂)には、“首里森と真珠森”、“首里森グスクと真珠森グスク”は対語として使用されることから首里城の聖名となっている。

## 御嶽（うたき）

村落の後背丘陵上にある拝所のことを御嶽と称し、村を愛護する祖靈神、島守神、ニライ・カナイなどと関係する聖域のこと。沖縄諸島では、同義語のムイ、ウガン、グスク、宮古諸島ではスク、八重山諸島ではオン、マー、スク、などと呼称されてきた。首里城内の御嶽について『琉球国由来記』（1713年編纂）には、九つの御嶽が掲載されている。

## 青磁 (せいじ)

磁器の一種。素地と釉薬の中に含まれる鉄分が、還元焰 燃成によって青く発色した磁器。中国の殷周・戦国時代の灰釉陶器がその源流とされ、後漢・三国時代の浙江省方面で製作された古越磁が最初の原始的青磁であるとされている。沖縄や日本で出土する青磁の多くは、元から明にかけて浙江省の龍泉窯及び、その周辺の窯で製作されたものである。

## 白磁 (はくじ)

磁器の一種。白地の素地に透明釉を掛け、高温で焼成した磁器。白磁の起源についてはまだ明確にされてはいないが、その起源は灰釉陶器や古越磁とされる。原始的な白磁が誕生したのは、6～7世紀の隋から初唐とされる。沖縄で出土する白磁には、稀に定窯で製作されたものがみられるが、大部分は景德鎮窯や中国南部の諸窯および徳化窯を産地とする。

磁器（じき）

素地は白色で、半透明で吸水性のない硬い焼き物をさす。陶石を原料とし、長石・石英などを配合して素地とする。素焼きした後に施釉し、1,100～1,500度の高温で焼成する。中国漢代末に始まるとされ、宋代に完成された。

## 青花〈染付〉・(せいか)〈そめつけ〉

磁器の一種。いわゆる染付で、中国では一般的に青花(青花白磁・釉裏青)と称す。白色の素地にコバルトを含む吳須による絵付けを施したあとに、透明釉をかけて焼成する。還元焰焼成により白地に青い文様が浮かび上がる。中国でのコバルトの使用は唐代にみられるが、釉下に絵付けする手法を用いたのは宋代以降であり、元代に完成する。青花の主な生産地として景德鎮窯および周辺諸窯があげられるが、明・清代には中国南部の各地に粗製の青花を生産する民窯があげられる。また、周辺諸国では中国の影響を受けて、ベトナムでは安南染付が、朝鮮では李朝初期から染付の製作が開始される。

※コバルト・・・・吳須などの天然の鉱物などに含まれる化合物で、青(藍)の材料として用いられる。

※吳須・・・・コバルト化合物を含む天然の鉱物をさす。これを極細粉末にして水に溶かし、文様を描いたあとに上から透明釉を掛けて焼き上げると藍色(青色)に発色する。

## 紅釉(こうゆ)

銅を発色剤に使用し、高火度で焼成された磁器。銅紅釉、辰砂釉とも呼ばれる。還元焰焼成により鮮紅色に発色する。中国では宋代に始まったとされるが遺品は元代が初出。景德鎮窯が主に宮廷御器を焼造し、明・清代を通じて官窯の特技として製作された。

## 瑠璃釉(るりゆ)

酸化コバルトを長石に混ぜた着色料を使用した釉色。高火度で焼成すると青く発色する。ほぼ全面に施釉した場合に称される。主に磁器に用いられていることが多い。日本や沖縄で出土する瑠璃釉の多くは景德鎮窯および中国南部の徳化窯で生産されたものである。

## 褐釉(かつゆ)

広い意味では鉄分を呈色剤として褐色になった陶器も含まれるが、陶磁史からみた場合には、中国漢代に栄えた酸化鉄を呈色剤とする低火度鉛釉のことをさし、その陶器を褐釉陶器と称する。沖縄で出土する褐釉陶器は、中国南部の広東省やタイで生産された12世紀以降の資料が多い。

## 合子(ごうす)

蓋のある小型容器の総称。蓋と身を合わせるの意。盒(子)・合ともいう。多くは扁球形で、素材は陶磁器、漆器、金属器などで、用途には香合、化粧品入れ、薬味入れ、朱肉入れなどがある。元来は蓋物の身を転用したもの。

## 瓶(びん)

壺・甕類のうち、その最小のものをさす。瓶は元来は水を汲んだり物を炊く道具であった。のちに、陶器の器で口が小さく、胴部の膨らんだ物をいうようになった。徳利や花生けとして使用された。

## 引用文献・参考文献

- ・『やきもの辞典』 平凡社 1991年
- ・沖縄大百科事典刊行事務局『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社 1983年
- ・金城亀信・上原 静ほか『首里城跡 一京の内跡発掘調査報告書(I)』沖縄県教育委員会 沖縄県文化財調査報告書 第132集 1998年3月
- ・那覇市立壺屋焼物博物館編『那覇市立壺屋焼物博物館開館記念 特別展 陶磁器に見る大交易時代の沖縄とアジア』那覇市教育委員会 1998年
- ・金城亀信・城間 肇『重要文化財 特別企画展 首里城京の内展 一貿易陶磁からみた大交易時代ー』沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年



---

---

重要文化財公開 首里城京の内跡出土品展  
— 冊封がもたらした陶磁器 —

発行年月日 平成 19 年 (2007) 1 月 16 日

編集・発行 沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

TEL 098-835-8751 FAX 098-835-8754

URL <http://www.maizou-okinawa.gr.jp>

---

## ご案内

第 24 回文化講座

### 「首里城跡出土陶磁器の近年の成果」

【日時】平成 19 年 1 月 20 日（土）午後 2 時～4 時

【場所】沖縄県立埋蔵文化財センター 研修室

【講師】瀬戸哲也（県教育庁文化課専門員）

## 沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

TEL 098-835-8751 FAX 098-835-8754

URL <http://www.maizou-okinawa.gr.jp>

開所時間：午前 9 時～午後 5 時まで（入所は午後 4 時 30 分まで）

休 所：毎週月曜日、国民の祝日（子供の日、文化の日を除く）、

年末年始（12 月 28 日～1 月 4 日）、慰靈の日（6 月 23 日）

※祝日と月曜日が重なったときは、翌日の火曜日も休所、その他、臨時（燻蒸）休所あり

交 通：◇沖縄自動車道西原 IC より車で 7 分

◇市外線バスターミナル発那覇バス 97 番 「琉大附属病院前」 下車徒歩 1 分

入 場：無 料